

2015.6.21 年間第12主日

なぜ怖がるのか。まだ信じないのか

マルコによる福音 4:35-41

その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

説教

イエスの前には嵐も静まる、一言でいえばきょうの福音はこのようになります。

ガリラヤ湖に突然の嵐が起こり、イエスと弟子を乗せた舟が「水浸しになる」つまり浸水して転覆しそうになっているのに、イエスは「艫（とも）の方で枕して眠って」います。弟子たちは元ガリラヤの漁師ですから、舟の操船には慣れているはずですが、舟は横波に弱く、波に対して舳（へさき、船首のこと）が直角になるように操ります。波を横からうけると舟は浸水します。舟を操るためには舵が必要です。舟の舵（かじ）は艫、船尾にあります。まさかイエスが舵の棒を枕して寝ていたわけではないでしょうが、操船の邪魔になっていたかもしれません。弟子たちの必死の願いに艫で寝ていたイエス

は起き上がり、一声で嵐を鎮めます。弟子たちはこの出来事に二重に恐れ入ったというのがきょうの福音です。

嵐を呼ぶ男という映画がむかしありましたが、ふつうに考えてみれば嵐を呼ぶ男は迷惑な人です。できればかかわりになりたくないのが人情でしょう。きょうの福音の解釈のひとつに「弟子たちに与えた試練」というものがあります。イエスが召しだした 12 人に対して、責任をもつイエスご自身がいかなるお方であるかを教えるために弟子たちを試練に導かれたという解釈です。きょうの第一朗読はヨブ記の 38 章でしたが、ヨブ記では神はヨブに試練を与えヨブを試されました。試練にあるヨブと友人との長い対話のあと、この 38 章で神が語り始め、この世界を創造し、すべてを支配していることを示しています。嵐のガリラヤ湖のイエスもこの文脈で解釈するとイエスと弟子たちが神とヨブの関係に対比できます。

イエスは嵐を呼び出し、弟子たちがどうするかを試し、そして嵐を静めたという読み方です。さっきの話じゃないですけど、嵐を呼ぶ男であったかもしれないということです。

きょうの福音テキストにはイエスの言葉は三つあります。

「向こう岸に渡ろう」 35 節

「黙れ、静まれ」 39 節

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」 40 節

向こう岸に渡るとは、5 章に書いてあるとおり、ゲラサ人の地方に行こうということです。こっちの岸ではもう教えたから、あっち、向こう岸にいったら教えるというイエスの宣教が広がる様子を示すことばです。

黙れ、静まれとは、イエスが自然に対しても権能、つまり支配していることを表現しています。

ところで、きのう（土曜日）の午後、自宅にいたところエホバの証人の二人連れが訪問してきました。いっしょにいた二匹の犬がワンワン吠えるなか一人の婦人が冊子を片手にわたしに語りだしました。一区切りついたところで、わたしがクリスチャンだと名乗ると、その婦人は挨拶をして去って行きました。ときどき訪問してくるエホバの証人の方達はいつもそうなのですが、クリスチャンだというとあっさり引き下がります。そのわりには何度も尋ねてくるのであっさりしていないのかもしれませんが、信仰と宗教を分けて考えている点に感心しています。悪口になるのでいいたくないのですが、ほかの宗教勧誘の場合、クリスチャンだと名乗ってもぐぐだする方が多いです。

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」このイエスのことばは信仰を迫っているおことばであり、宗教を求めているのではないのだ、とあらためて思います。ガリラヤ湖はこの世界でもあります。風は予期せず吹いてくる。この世の煩いを象徴する予期せぬ嵐、私たちもこの世の思い煩いの中で翻弄されます。しかし、何事にも動じない主は御父を枕に眠っておられます。そして信仰者であるわたしたちは主イエスとおなじ舟に乗っているのです。

イエスはきょうもわたしたちを励まします。

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」